

受験番号

2026年度 大学院比較文化研究科「前期博士課程」春期入学試験問題

専門科目（解答例）

問題番号（ 1 ）を選択した場合の解答例

例えば、下記の事項に言及し、論理的な記述を拡充していればよい。

民族誌を「書くこと」について

- フィールドワークで得た個別のかつ具体的な事実と、人類文化の普遍性との間を往復運動させる創造的な営為であること。
- 単なる記録ではなく、自己と他者、学術コミュニティや一般読者に向けての対話の実践であること。
- 個別事例の中に潜む普遍的な何かを提示することにその意義があること。

民族誌を「読むこと」について

- 一人の研究者が生涯に直接調査できる社会は限られるため、他者の書いた民族誌を「読むこと」は、自ら調査できない多様な文化を知り、普遍へ至るための不可欠な手段となること。
- 単なる情報収集ではなく、人類学的な議論に参加し、人類の普遍性の検討に接近する実践であること。

民族誌を「書くこと」と「読むこと」の関係について

- 共に「民族誌する」という人類学的営為を構成する両輪であること。

問題番号（ 2 ）を選択した場合の解答例

例えば、下記の事項に言及し、論理的な記述を拡充していればよい。

- 文化人類学におけるジェンダー研究の端緒はM. ミードであること
- ミードは『男性と女性』などを通じ、性差が生物学的な先天性ではなく後天的な文化的構築物であることを提示したこと。
- 1970年代にはS. オートナーやM. ロサルドが、レヴィ＝ストロースの二項対立を応用し、「自然／文化」や「家庭内／公的」という図式を「女性／男性」に当てはめ、女性の普遍的劣位性を論じたこと。
- こうした二元論は西欧的視点の投影であり、女性を一様な存在とみなす本質主義であるとの批判がなされたこと。
- 以降、ジェンダーは歴史的・社会的に構築されるとする構築主義が主流となり、インドネシアの「チャラバイ」のような第三のジェンダーや、年齢・階層による多様性など、単一のカテゴリーに収まらない多面的な分析が展開されていること。

問題番号（ 3 ）を選択し、「儀礼と社会秩序」について論じる場合の解答例
例えば、下記の事項に言及し、論理的な記述を拡充していればよい。

- 儀礼と社会秩序の関係は、V. ターナーの「コミュニタス（反構造）」論を中心に議論されてきたこと。
- ターナーは、儀礼の過渡期に日常の階層秩序や規範が一時的に停止・逆転し、平等で無礼講な状態が現れるとしたこと。
- この混沌（カオス）は、硬直化した日常の秩序を再活性化させる機能を持つとされること。
- これに対し M. ブロックらは、儀礼には無秩序だけでなく、理念化された厳格な秩序も並存していると指摘したこと。
- 儀礼における一時的な秩序の攪乱や逸脱は、逆説的に「あるべき秩序」の意義を再確認させ、社会構造を維持・強化する装置として機能していること。

問題番号（ 3 ）を選択し、「T. アサドの議論」について論じる場合の解答例
例えば、下記の事項に言及し、論理的な記述を拡充していればよい。

- T. アサドは、C. ギアツに代表される象徴体系としての普遍的な「宗教」定義に対し、それが西欧近代固有の歴史的産物であるとして批判を行ったこと。
- アサドによれば、宗教を政治や権力から切り離された個人の内面的・象徴的な領域として定義する視点は、啓蒙主義以降の西欧社会において「宗教」と「世俗」が概念的に分離された歴史的過程を前提としていること。
- こうした西欧的な宗教概念を普遍的なものとして他社会に適用することは不適切であること。
- アサドは、超歴史的な宗教の本質を定義しようとするのではなく、「宗教」という概念自体がいかなる歴史的・政治的文脈の中で構築されてきたのかを問う「宗教の系譜学」という視座を提唱し、西洋中心的な人類学の認識論を批判的に再検討したこと。